

## 「魅せる」「惹かれる」パッケージ創りで社風に改革を興す!!

-大学新卒雇用で仕組み作りが大きく変わってきた-

「泣き笑いシリーズ」第18回のテーマは大学新卒雇用です。今回取材させていただいたのは谷町で紙器製造業を営む川田紙工株式会社の川田昭宏さん(中之島支部所属)です。

7年間のサラリーマン生活を経て、川田紙工に入社した川田さんは営業部に携わります。当時はメーカーの下請け業者として賃加工が大きな柱でした。しかしIT化等の業態の変化によって賃加工業の売上は年々下がっていきます。



川田紙工株式会社  
代表取締役社長  
川田 昭宏

そんな折、予てから脱下請け業を考えていた川田さんは自社ブランド品ができないかと「川田カレンダー」を提案し、社内に企画チームを立ち上げます。「そんなんやる間ないわ」とこれまで賃加工業に慣れ親しんだ古参職人は乗ってくれませんでした。わが社には長年培った加工技術があるのだが、その技術の伝承が上手くいっていない、それは中途採用で即戦力となる職人を雇用してきた結果、人に物を教える仕組み(風土)がない、人の入れ替わりが多い現場に雰囲気も悪くなっていく…そんな時、同友会の先輩から「新卒社員が社員数の半数を超えたら会社は劇的に変わるで」と聞かされた川田さん『うちに新卒なんて無理や、育てる自信も環境もないわ』と尻込みしていましたが、そう言っていられないと奮起し、合同企業説明会に参加しました。

会社案内やHPの作成・就業規則の見直しなど、新卒雇用をするには会社の環境も変えていく、そのことが現社員の意識を変えるきっかけになりました。新卒雇用は今期で4年目を迎え、これまで3名の新卒者を雇用できました。そして今年は3名の内定者が決まっています。「先輩ぶるのではなく先輩らしくふるまえ」と社風作りに力が入ります。春が待遠しいと声高らかに笑う川田さん、川田紙工のつぼみは今年もさらに大きく膨らみ始めています。

## 同友会会員へのメッセージ

新卒採用を始めて3年が過ぎました。当初は新卒採用など、環境も整っていない当社にはまだまだ遠い先の話だと思っていました。しかし、同友会の先輩経営者の方に勧められ、本気で理想の会社にしていくなら絶対に必要だと感じ、やるなら早い方がいいと思い取り組みました。わからないことばかりでしたが共同求人部会の方々に教えていただきながら、何とか採用することができました。新卒採用を続けることで、本当に少しずつですが確実に社内の雰囲気が変わってきていると実感しています。毎年、新入社員が入ってくることで、先輩は意識して成長していきます。先輩が後輩を育てるという風土が生まれ、何かを伝える時や仕組みを考える時には「新入社員でもわかるように」という考え方ができるようになってきました。育てなければならないと思って、なかなか手を付けられずにいた新卒採用でしたが、今は、私を含め先輩社員の方が教えられることが多く「もっと自分達が成長していかない」と感じさせられており、新入社員と共に成長して行こうという風土が芽生えてきたように思っています。



## 「泣」

新卒採用をして大変なのは、やはり育てて行く、教育していくこと。社内にそういう空気を作る、環境改善(見直し)が大変でした。採用したら、当然、次は教育をしていかないといけない、しかしこれまで中途採用ばかりだったので、新入社員教育などしたことがないのです。初日から、先輩社員に付いて作業をしながら覚えていけということしかやっていない、社員教育のカリキュラムづくりや実際に教育していくことに初トライ。

教える側の先輩社員も、そういった教育を受けていないので教えながら自分も学んでいくことが大切なことに気付くのも作業(仕事)をしながら。その環境と時間と意識を持っていくことがなかなか難しく(教える側のほうが勉強不足で。そっちの「共育」も必要)新入社員と共に育つ環境づくりをさらに進めていかなければと思っています。



## 「笑」

合同企業説明会はマイドーム大阪にて、各社ブースにおいて自社を20分間、数クール繰り返し実施します。一昨年のことです、ここに大卒1期生の女子社員を同席させました。最初は私の横で会社説明を聞いているだけでしたが、私が席を離れることがあって戻ってみると、その女子社員が学生相手に商品などを上手く説明していました。後で聞くと説明会に行く前に「一人で説明しなくてはいけない場面があるで」と先輩から聞かされていたから心構えができていたとのこと。後輩の面倒を見る、我が社に教えるという風土ができつつあると確信できた瞬間でした。



## 「取材を終えて」

川田さんとは青年部会時代のころから仲良くさせていただいています。知り合ったころは「俺が、俺が」とバリバリの営業マンといった印象で、会社より個人の取り組みが前面に出ている感じでした。

しかし『川田カレンダー』に取り掛かったころから、川田さんが会社でしたいことが見えてくるようになりました。今後の取り組みの話の中でも社員の成長に合わせパッケージのアンテナショップを考えているといった目標の話も聞けたり、取材をしていく中で経営指針について共感できることがいっぱいありました。

お互い青年部会を卒業してからは顔を合わす機会も減りましたが、志す企業像に向かって学ぶ姿勢は変わっていません。これからも良い仲間であり、ライバルであり続けていけるようこちらも頑張らねばと思った次第です。